



Title	高齢者のネットワークづくりと親子関係
Author(s)	水嶋, 陽子
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3155085
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	みず 嶋 陽子
博士の専攻分野の名称	博士（人間科学）
学位記番号	第 14332 号
学位授与年月日	平成11年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科社会学専攻
学位論文名	高齢者のネットワークづくりと親子関係
論文審査委員	(主査) 教授 大村 英昭
	(副査) 教授 橋本 満 助教授 川端 亮

論文内容の要旨

老年期の親子関係が流動的であることは、子供が高齢者を丸抱えしなくなったこととして、福祉行政論において大問題である。本研究は、こうした親子関係の流動化を、やや別の角度から、すなわち高齢者の作り出すネットワーク（選択縁）と関連づけて捉える試みである。

一章では統計調査資料から、老年期のネットワークは男女で大きく違うこと、そして近年の同居率の低下は、子供への依存志向の低下ではないことを確認する。むしろ新傾向として、要介護状態になる迄の元気な間、子供と同居しない時期が出現しているのである。続く二章で先行研究を検討し、親子関係とネットワークの相互関連を捉えるという分析視角をえる。この視角から、調査事例を元に三、四章では、高齢男女は地域でどのようなネットワークを作っているのか、そして高齢女性の親子関係とネットワークの相互関連を検討した。用いたデータは、地域で活動する老人会の男女会員、福祉住宅に住む独居女性、やや高い階層に属する女性から収拾したライフストーリーである。

ネットワークづくりに着目すると、親子という血縁関係の流動化にそこそこ対処している高齢者の姿が浮かんでくる。明らかになったのは、①高齢者は社会構造上に制約を受けていたが、公私の区分からするとあいまいな、中間領域においてネットワークづくりをしていること。②高齢女性は広げたネットワークと両立するように、子供との結びつきを調整しており、子供に生活の多様性を保障するような関係を求めていたことである。

老年期の人間関係として、従来日本文化論では、親子関係とネットワークは二律背反のものであると捉えていた。だが日本の高齢女性の場合という条件付きであるが、二つの人間関係は競合せず、相補的関連であると結論づけられる。最後に、高齢者が人間関係を巧みに使い分けることができているのは、超高齢社会への過渡期としての現代の特徴であることを指摘する。

論文審査の結果の要旨

本論文は、同じ高速高齢化社会を取り上げつつも、従来の高齢者問題論が、ややもすれば被扶養者ないし要介護者としての老いに注目しがちであった点を批判し、大衆長寿（→secular shift in aging）の時代とは、実は、むしろ元気な老いが大量につくり出されている社会であると把え返し、その元気な老いが、親子関係や友人ネットワークを

現にどう活用しているか……を、自身が実施した計3回に及ぶ調査データにもとづき詳細に分析したものである。で、分析の結果は、単に高齢者問題論に一石を投じたに止まらない。一つには、戦前の「家」並びに戦後の“マイ・ホーム”的、とりわけ閉鎖性を問題視してきた我が国の家族社会学一般に対してかなりのインパクトをあたえるであろうこと、二つには、親子関係など非選択縁との競合関係を前提にして展開されつつある（友人）ネットワーク論一般に対しても、新たな見方を提供したものと評価されるだろう。今後、さらに国際比較の手法及びデータを加味していくなら、日本文化論一般に対しても、興味深い知見を加えていくものと期待される。